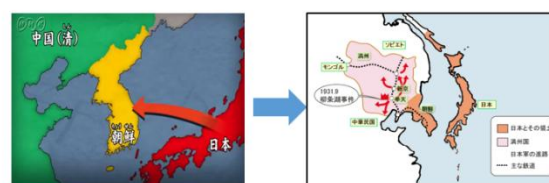


## 防衛費のリアル(10) 国力研究③日中の比較

1941年の日米開戦時、米国のGDPは日本の10倍超、まさに桁違いでした。国力の歴然たる差は、首相肝煎りの総力戦研究所のシミュレーションで的確に把握されていました。それにも拘らず、蛮勇にも似た開戦の道を選択したのは何故か？「失敗の本質」は、日米開戦に先立つ10年間の日中戦争の泥沼にあったという仮説があります。

そこで、今回は、この仮説を検証するために、日中の国力に焦点を当て、1894年日清戦争以来、日中15年戦争の端緒となった1931年の満州事変の頃の日中の国力を俯瞰してみたいと思います。もちろん、国力には、国土の広さ、工業生産力、資源保有量、輸送(兵站)能力、そして、人口構成など多くの関連指標がありますが、ここでは、前回と同様、シンプルに、GDP(国内総生産)、つまり、国民が1年間に生み出す付加価値の合計を代表的指標に、人口を参考値として、歴史を振り返ってみます。

まず、1894年日清戦争の頃、日本のGDPは、右表の通り、中国(清王朝)のたった20%でした。そして、眠れる獅子とは言え、大国の清に戦勝した日本は、台湾も植民地とし、「志那、恐れるに足りず」と受け留めました。



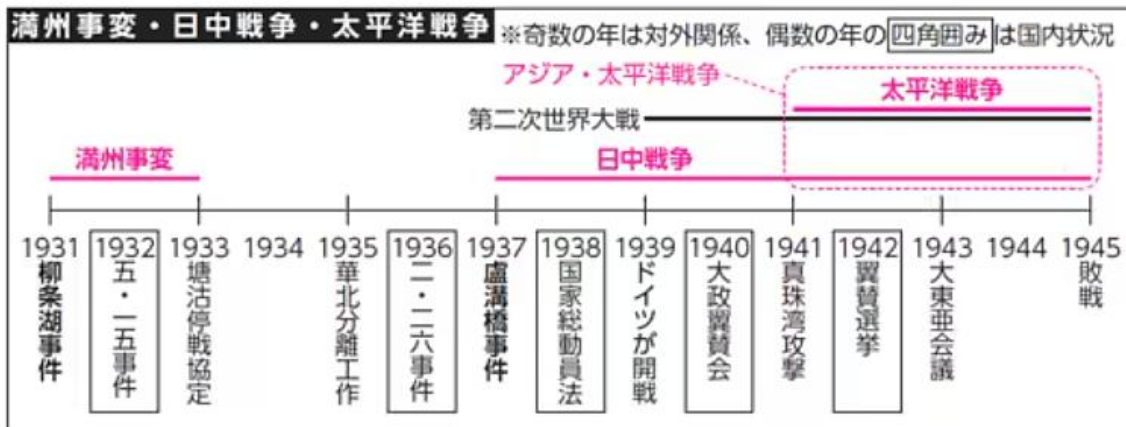
1894年 日清戦争

1931年 満州事変

|    |     |          |          |
|----|-----|----------|----------|
| 日本 | GDP | 740億ドル   | 2165億ドル  |
|    | 人口  | 4000万人   | 6500万人   |
| 中国 | GDP | 3600億ドル  | 5000億ドル  |
|    | 人口  | 3億9000万人 | 4億9000万人 |

以降、1911年清王朝は滅亡し、中華民国が誕生しましたが、軍閥割拠の混乱が続き、20年後には、日本のGDPは中国の40%を越えていました。日清戦争ではGDPが中国の20%でも勝てたのだから、40%になった今は、志那は切取り放題、「満蒙の沃野を頂戴せよ」が合言葉となりました。参謀長・石原莞爾によって周到に準備され、関東軍の自作自演の柳条湖事件(南満州鉄道の爆破)を口実として、満州の植民地化に突き進みます。

教科書では、下表の通り、1937 年（昭和12年）に始まった北京郊外の盧溝橋事件より「日中戦争」とされていますが、1931年の満州事変以降、各地で傀儡政権をつくった華北分断工作、上海事変、そして南京事件など14年以上に渡って断続的に侵略の続いていたことが分かります。（加藤陽子（東大教授）著「満州事変から日中戦争へ」（岩波新書））



この間、大日本帝国陸軍は中国を侵食し、各地で攻勢に出ましたが、蒋介石の国民党軍、毛沢東の共産党軍は、時に内陸の重慶や四川省まで逃げ、時に国共合作で反抗に出て、泥沼の様相を呈しました。あまり正直な報告はされなかったですが、各地で連戦連敗だったのが史実です。

「国力では互角なのに、なぜ志那に勝てない？」との疑問が軍部に出ると、「中国を背後で支援している米英憎し」の論点すり替えが目立ち始めました。結局、大東亜共栄圏と言いながら、実態は植民地収奪、戦略も大儀もなきままに、ずるずると続けてきた日中戦争の消耗が、日米開戦の主因となったのは確かなようです。

GDP で互角になったと言えども、人口、何よりも、国土の広さ（懐の深さ）を考えると、幕末に続き、またしても国力の冷静な評価を誤ったことが悔やまれます。さらに、潔く責任をとらず、毒食わば皿まで、日米開戦で新たな戦線拡大をしていったことが、アジアの諸国民2000万人と日本人310万人の命を奪い、さらにその何倍もの人々に塗炭の苦しみを与えました。

次回は、過去の国力評価の苦い経験を踏まえて、現代の日中の国力評価を行いたいと思います。（竹の台 西元）